

平成31年3月15日号 「森のひと言」

—すべての色に役割がある—

この言葉は、先日、私の誕生日に旧友がメールで贈ってくれたメッセージにあった言葉です。経営の神様と呼ばれた松下幸之助氏の名言を引用したそうです。さらに「どんな人にも、その人にしかできない役割がある。その役割を見抜いたとき、強いチームを作ることができるのだ」と述べていました。そして「森君が大変な時にこの言葉を思い出してください」と書き添えていました。友人は、最近の三田の出来事を心配して励ましのメールを贈ってくれたのか、あるいは最近、いろいろな所でパワーハラスメントが話題になっていることから、アドバイスの意味でメールを贈ってくれたのかわかりませんが、長年の友情に感謝しています。

人には人格あるいは個性があり、それぞれ違う「色」を持っていると言えるでしょうし、地域もそれぞれ歴史や風土が異なり、それぞれの地域が違う「色」を持っていると言えるでしょう。さらには、生物もそれぞれ違う「色」を持っており、いわゆる「生物多様性」の考え方にも通じるメッセージではないかと思います。

市職員の人材育成をはじめとして、子ども・教育施策、人権・福祉施策、コミュニティ施策、環境施策、まちづくり施策など、これからの成熟した三田市政を推進していく上で、「すべての色に役割がある」というこのメッセージを大事にしながら進めていきたいと考えています

平成31年2月15日号 「森のひと言」

—住み続けたいまち—

市内の学校に通う18人の高校生が参加して、4回目となる高校生議会を開催しました。今回は、事務局がさまざまな工夫をしたこともあり、私たち市幹部の答弁に対し、鋭い再質問を行った高校生も多数見られました。18人の若者が、学業やクラブ活動等で忙しい中、市政のさまざまな課題について十分な調査を行い、質問や提案にまとめ上げてくれたことにとっても感動しました。「学びの都 三田」の子どもたちは、高校生議会に参加する高校生のように、家族や先生はもとより多くの市民の方々の応援を得て、たくましい若者に育ってきています。

しかし、残念なことに、高校卒業後、東京などの遠方の大学等に進学したり、関西の大学等に進学しても東京などに就職したりするため、生まれ育った三田のまちを離れていく若者が多くなっています。三田だけではなく兵庫県全体が、多くの若者の県外への流出に危機感を持っています。

三田の若者に住み続けてもらうためには、三田のまちに魅力がなければなりません。そのためには、市民の皆さんの理解と協力を得て、(1)「働く場所を確保するため」の産業政策をより一層進めるとともに、(2)「安心して暮らすため」の医療・福祉施策の充実や、(3)「生活を楽しむため」の文化・スポーツの振興に力を入れていきたいと考えています

平成31年2月1日号 「森のひと言」

—やさしい共生のまちを目指して—

先日の三田市の成人式で、新たな三田市イメージソングが披露されました。この歌は、市民である「ちめいど」のお二人に、多くの市民の皆さんと交流を深めていただきながら、共に創り上げていただきました。三田市民による三田市民のための三田市民の歌とも言えるものです。ちめいどのお二人とご協力いただいた市民の皆さんに深く感謝申し上げます。

三田市では、昭和 63 年の市制施行 30 周年を機に、愛唱歌「三田が翔びたつ」を作りました。「三田市の成長していく時代の市民の熱い想い」を歌い上げた素晴らしい歌です。これからも歌い続けられるでしょう。これに対し、この度誕生した市のイメージソング「やさしい風の吹くまち」は、成長から成熟の時代へと大きく三田市が変わっていく中で、「成熟の時代の三田の目指すべきまち」の姿を象徴する歌ではないかと感じています。

私は、「やさしい風の吹くまち」とは、「人と自然との共生」、「人と人との共生」、「地域と地域との共生」が、市民一人一人の生活に息づいているまちではないかと考えています。

この歌のような「やさしい風の吹くまち」の姿を、市民の皆さんと共に考え、共に創り上げていくとともに、三田の新たな魅力として市外の人たちに広く発信してまいります。

平成 31 年 1 月 15 日号 「森のひと言」

—新時代の働き方考える—

今、日本社会のさまざまな分野で、「働き方改革」が進められています。約 10 年後の 2030 年には、急速な科学技術の進展もあり、従来は人間の労働であった単純な事務処理や窓口業務の多くが、AI(人工知能)やロボットが行うようになっているでしょう。

一方、働く人たちには、高度な専門知識に加え「新たな発想」を生かした企画・調整業務に精通することが求められてくるでしょう。

「新たな発想」は、多様な体験の中から生まれることが多いと言われています。多様な体験は多くの人々との出会いから生まれます。さまざまな世代や価値観を持った人たちと出会う機会を積極的に作っていかねばなりません。さらに、外国人との出会いの機会も大切です。そのためにも、仕事以外にさまざまなボランティア活動への参加は貴重な体験です。

また、企業や役所が「新たな発想」を生み出しやすい職場環境を整備していくことが必要です。例えば、休暇制度の充実とともにフレックスタイムや在宅勤務などの仕組みが大切です。

今年の三田の新成人は、1286 人。2030 年、彼ら彼女らは、多様性を大切にする職場で新たな発想を次々生みだしてくれるでしょう。頑張ってください。応援しています。

平成 31 年 1 月 1 日号 「森のひと言」 —「共」に「創」ろう新時代の「三田」を—

新年、あけましておめでとうございます。

今年が、市民の皆さんにとりまして希望に満ちた年になりますよう、心からご祈念申し上げます。

昨年は、三田市制施行 60 周年を迎え、多くの団体・企業・市民の皆さんと連携したさまざまなイベントを通じて、三田の歩みや多くの先人のご苦勞を振り返るとともに、これから目指すべき成熟のまちづくりを考えていただく機会になりました。また、夏の集中豪雨や何度となく接近した台風により、改めて災害への備えと安全安心の大切さを実感する一年でした。

さて、経済成長の中で平和を求めてきた「昭和」を過ぎ、経済の低迷と大災害を乗り越えて「人々の絆」のもと、新たな日本の道筋を模索していた「平成」の時代も終わろうとしています。三田市も「成長から成熟」へと新たなまちづくりを始めています。

人口減少と高齢化・少子化が加速する中で、農業の営みを大切にしながら築いてきた「地域でのつながり」、都市部に隣接しているという「交通の利便性」、里山に囲まれた「自然と共生する住環境」、そして大学や博物館などのある「優れた教育環境」等を十分に活かすとともに、隣接する自治体との広域連携を進めながら、市民一人一人が愛着と誇りを持てるような「風格のあるまち」を、市民の皆さんと

「共」に「創」っていきたいと思います。今年は、そのための大きな一歩の年にしていきます。

平成 30 年 12 月 15 日号 「森のひと言」

—温かな光あふれる三田のまちに—

かつて、三田市内の多くの家々にはクリスマスツリーが飾られていました。中には、家の庭や玄関先にイルミネーションが点灯されている住宅地もありました。ニュータウンが開発され、子育て世代を中心に多くの人たちが転入されてきた成長期の三田の冬の風物詩でした。

私自身、勤めていた頃、12月には仕事や忘年会で多忙でしたが、駅から家に帰る道すがら、あちこちの家の窓に映るクリスマスツリーの光に癒されながら家路を急いだものでした。子どもたちが大きくなって、市外へ進学や就職されるなど、高齢者だけの世帯が増え、家でクリスマスツリーを飾ったり、庭や玄関先にイルミネーションを点灯する家が減り、少し寂しく感じます。

しかし、「サンタ×三田プロジェクト」が今年で4回目を迎え、三田の新たな冬の風物詩になろうとしています。今年も、市民の皆さんから提供されたイルミネーションを飾る市役所前の風の広場をはじめ、三田駅前、有馬富士公園、大学のキャンパスなど市内のあちこちで、イルミネーションの光のもと、さまざまなイベントが行われています。仕事で疲れた人々の心を温かくするとともに、子どもたちに心に残る思い出をプレゼントしてくれるのではないのでしょうか。12月、三田市は一つの「家族」になって、みんなでイルミネーションの光を楽しむ「サンタシティ」になります。

平成 30 年 12 月 1 日号 「森のひと言」

—ゴール無限—

先日、今回のマスターズマラソンのゲストランナーをお願いしています君原健二さんと「伸びゆく三田」平成31年1月1日号新春鼎談の企画でお会いしました。約1時間半、スポーツをテーマにさまざまなお話をお聞きしました。

57歳から走り始めた市民ランナーの私ですが、君原さんの全てのマラソンレースで完走を目指し果たされた強い精神力に憧れを覚えます。特に、2016年のボストンマラソンを75歳で完走されたことには、とても感動しました。この度、初めてお会いした際に驚いたのは、想像以上にとても控えめで誠実な人柄が感じられる方であったことです。

色紙に「ゴール無限」との言葉を署名付きで書いていただきました。どのような意味を込められた言葉かはよくわかりませんが、なぜか心に響く言葉でした。「ゴール無限」の言葉に私は二つの意味を感じました。一つは「ゴール、それは目標であり、夢である。人は、生きている限り常に追い求めるものである」、もう一つは「ゴール、それは一人一人違うものであり、長い人類の歴史の中で無限に近い数だけ存在するものかもしれない」。

今年は、多くの災害などがあり逆風の一年でしたが、平成最後のマスターズマラソンのゴールを目指して、風に向かって、私自身も「ラストラン」としてしっかり走り抜きたいと思います。

平成 30 年 11 月 15 日号 「森のひと言」

—イクボス宣言のまち—

11月1日は、三田のまちづくりに新たな変化の始まりを感じさせる日でした。三田駅前のまちづく

り協働センターに、三田市役所をはじめ市内13の事業所・団体の代表者が集い、「三田イクボス共同宣言」に署名しました。事業者等と一緒にイクボス宣言をしたのは、兵庫県下では初めてです。各組織の経営者や管理職がイクボスを目指して具体的な行動を起こすことにより、働き方を見直し、社会全体で子育てや介護を支え合っていくことを誓い合いました。

三田市役所でも、私を先頭に具体的な行動を進めていきます。例えば、新たに男性職員の育児参加休暇を創設したり、人事評価項目にイクボス目標を設定したり、積極的な女性管理職の登用など13の行動目標を掲げました。これから、しっかりと目標達成に向けて取り組んでいきます。

三田市は、これまで「住みたいまち」をまちづくりの柱にしてきました。また、最近は「学びたいまち」をまちづくりの柱に加えてきました。これからは、これらに加え、働き方改革を進めるイクボス宣言を通じて「働きたいまち」に選ばれるようなまちづくりも進めていきます。「三田は、住んでよし、学んでよし、働いてよし」そんな生活・産業都市を目指していきます。

平成30年11月1日号 「森のひと言」

—里山は日本人のこころ—

災害が多発した今年の暑い「夏」もようやく終わり、里山の木々の色合いも変わっていく「秋」の訪れを迎えました。秋の訪れを感じると必ず思い出すメッセージがあります。「北摂里山は日本人のこころ」というメッセージです。平成23年当時、県立人と自然の博物館館長をされていた岩槻邦夫(いわつきくにお)先生(日本を代表する植物学者で文化功労者)にいただいたメッセージです。当時、私は阪神北摂北摂局で職員とともに、里山を展示室に見立て、広大な地域をまるごとミュージアムにするという「北摂里山博物館」構想の企画に夢中になっていました。そして、この構想のコンセプトを固めるに際し、岩槻先生に里山についていろいろと教えていただきました。「みどり豊かな日本列島に住みついた日本人は、歴史を通じて自然と上手に馴染み合って生きた。わずかだけの平野と谷地を開拓し、農地にして生産力を高め、奥山は野生の動物に譲って、里山で豊かな資源を獲得し、人と自然の共生を演じてきたのです。」など、里山を通じての日本人の自然観も学ばせていただきました。

三田は、農村地域という長い歴史の上に、里山を切り拓いて大規模なニュータウンが加わったという特異なまちづくりを進めてきました。市民のご理解とご協力のもと、日本人のこころを忘れずに、先人から受け継いだ里山と共生するまちづくりを進めていきたいと思えます。

平成30年10月15日号 「森のひと言」

—虐待事案を教訓に、共生のまちづくり—

9月20日、三田市障害者虐待に係る対応検証委員会から、検証報告書を受け取りました。検証結果の主な要点は二つです。

一つには、市の対応が「本人中心ではなく、家族中心であったため、障害者本人の保護が遅れ、警察への通報が遅れてしまった。本人の自由、尊厳に対する感覚が乏しかった」ことです。

二つには「20年以上もの長期間、障害者本人への支援ができなかったのは、当時のケース記録の引継ぎ等が機械的で個人任せ、組織として機能していなかった。社会の価値観や法制度の変化に行政や家族が追い付いていなかった」ことです。

これらの要因に基づく問題点の指摘や提言については、真摯に受け止め、二度とこのような虐待事案が発生しないように、市役所職員の意識改革を進め、体制を見直すとともに、虐待の未然防止のための新たな取り組みを進めていきます。

さらに10月2日には、兵庫県知事を訪ね、今回の検証結果について意見交換をさせていただき、県下の市町をはじめ、警察、教育、施設関係団体との情報共有と連携について支援をお願いしてきました。市長として、今回の事案を決して忘れることなく新たな教訓として、三田の誰もが心豊かな社会生活が送れるよう「共生のまちづくり」に向けて積極的な施策を講じてまいります。

平成30年10月1日号 「森のひと言」

—里山が美しい秋を迎えて—

災害の多発した夏が過ぎ、里山が美しくなる秋がやってきました。さて、9月15日号の市広報紙臨時号に「例外となる野外焼却のガイドライン(案)」を添付し、市民の皆さんに、法令上例外的に「農業を営むためにやむを得ないものとして行われる廃棄物の焼却」の考え方を示しました。今後、寄せられた意見を精査し、ガイドラインを確定させるとともに、12月市議会定例会に「(仮称)里山の保全と活用に関する条例」に廃棄物の野外焼却に関する考え方を盛り込む予定です。本市の野焼きを巡るトラブルは、マスコミの報道もあり近隣自治体の皆さんにも注目されているようですが、このことについては、市長として心を痛み責任を感じています。

今回の野焼き問題は、ガイドライン(案)の公表および条例制定という住民自治の原則により、解決を目指すこととしました。本市では、以前より、まちづくり基本条例等の制定を通じ、市政への市民参加や少数者の権利主張を尊重し「民主主義の成長」を進めてきましたが、今後は、多様な価値観を認めながらも一定の解決を目指す「成熟した民主主義」によるまちづくりを一層進めなければなりません。市民同士、機関同士の対立をおおるのではなく、「生活環境と農業振興の調和」による漸進的解決を目指していく過程を市内外に示すことで、三田の「成熟した安全なまち」のイメージを一日も早く取り戻さなければならないと思います。

平成30年9月15日号 「森のひと言」

—ラジオ体操が、三田のまちにやって来た—

去る8月27日、NHKラジオ第1で生放送される「夏期巡回ラジオ体操・みんなの体操会」が、駒ヶ谷運動公園多目的広場で開催され、子どもから高齢者まで約1100人の方々が参加されました。私もあいさつをさせていただいた後、皆さんと一緒にラジオ体操を行いました。

小学生の頃(東京オリンピック開催直前の昭和30年代)、毎年、夏休みになれば、近所の広場に集まって出席カードに押印してもらうのを楽しみに、姉や弟と一緒にラジオ体操に参加したものです。

今回のラジオ体操の生放送は、三田市制施行60周年を記念して誘致したもので、三田の開催は20年ぶりです。放送が終わってから、NHKの方から、市制施行70周年もいかがですかと誘われました。私はその時76歳ですが、開催が決まればぜひ参加したいものです。

誰もが、体力に応じて参加できるのがラジオ体操の魅力です。そして、隣近所の多世代がふれあい、コミュニティ意識を醸成するきっかけになるのもラジオ体操のもう一つの魅力です。コミュニティが希薄になってきているといわれている今、90年の歴史を持つ日本独特の大衆文化であるラジオ体操の大切さが見直されているのかもしれない。

平成30年9月1日号 「森のひと言」

—平成最後の夏—

平成最後の夏が終わろうとしています。今年の夏は、毎日、酷暑、豪雨という言葉が、新聞紙面やテレビニュースで見られました。昭和の時代とは、暑さの程度や雨の降り方が大きく変わってきていると感じられます。また、酷暑や豪雨に伴う安全・安心のための対策が強く求められた夏でもありました。多くの犠牲者が出た「西日本豪雨」から、改めて多くの教訓を得ました。こうした教訓を活かした対策を着実に進めるとともに、平成に起こった阪神・淡路大震災や東日本大震災と同じように教訓をしっかりと語り継いでいかねばなりません。昭和の時代では「戦争と平和」の教訓を、平成の時代からは「災害と安全・安心」の教訓を、多くの犠牲を伴いながら得たことを決して忘れてはいけないと思います。

9月市議会定例会に約5億円の補正予算を提案しました。主な内容は、今夏起こった災害や事故の教訓から急いで市民の皆さんのために行うべき対策をまとめたものです。

特に、市立小学校・幼稚園のエアコン設置のための予算措置は、厳しい市の財政状況ではありますが、子どもの命を守るとともに「学びの都、子ども・子育て応援のまち」にふさわしい教育環境の整備を急ぐ必要があると判断し、今年度設置した市立中学校に続いて整備を進めていきたいと考えております。市民の皆さんのご理解をよろしくお願いします。

平成30年8月15日号 「森のひと言」

—野焼きに見る地域での共生—

29年前、私たち家族は、フラワータウンに引っ越してきました。近くの農地から煙が立ち上るのに最初は驚きましたが、その後、農家出身の友人から説明を受け、「野焼き」が長年受け継がれてきた農家の知恵であり、農業だけでなく農村のコミュニティ形成にも役立ってきたことを理解しました。

三田の魅力の一つに、住宅地に緑豊かな農村が隣接していることが挙げられます。地域と地域との共生と、地域内での人と人との共生は、成熟のまちづくりを進めるうえで欠かせないものです。

この度、野焼きをめぐるさまざまなトラブルを防ぐため、農業を営むためにやむを得ないものとして行われる野焼きについて、農業の振興と地域の生活環境との調和を図るため、農家の皆さんに一定のご配慮をお願いするとともに、市民の皆さんに野焼きについて正しく理解していただきたい事項を定めたガイドラインを策定します。このガイドラインは、先のオンブズパーソンの調査結果を参考にしながら、市が環境政策や農業政策の専門家等の助言を受けながら9月当初をめどにまとめていきます。

当面はガイドラインを基に相談の受け付けや啓発を行います。野焼きに関する調整条項を盛り込んだ「(仮称)里山の保全と活用に関する条例」を市議会に提案していきます。民主的手続きを経て野焼き問題の解決を目指していきます。関係機関をはじめ市民の皆さんのご理解とご協力をよろしく申し上げます。

平成30年8月1日号 「森のひと言」

—自然災害と戦争—

7月初め、西日本の各地が激しい豪雨に見舞われました。豪雨で亡くなられた方々に哀悼の意を捧げるとともに被災された方々に心からお見舞い申し上げます。一日も早い復旧・復興を願っています。そして、激しい豪雨の後、厳しい酷暑が日本列島を覆っています。今までに経験したことのない自然現象(気候変動)です。科学技術の進歩で、自然現象の解明や予測が進み、概ね、地震を除けば防災対策を整えることが可能になってきました。しかしながら、事前に予知できても経験したことのない自然現象への対応は不十分で、まだまだ多くの犠牲者や被害を生むことになっています。今後とも、市としては、

防災・減災を、市民の皆さまのご協力のもとしっかりと進めていかねばなりません。

さて、自然災害を完全に防ぐことは人間の力では不可能に思えます。一方、同じく人命や社会生活に被害が生じる「戦争」ではどうでしょうか。一人ひとりが寛容の精神を持って知恵を出し合えば、人間の力で防ぐことができるのではないのでしょうか。しかしながら人類の長い歴史を見ると、地球上では多くの戦争が繰り返し行われてきました。「人類の進歩とは何なのか」と改めて問わざるを得ません。

三田市は、平成元年に「非核平和都市宣言」を行い、多くの市民の方々の協力で8月を中心に市民主体の平和運動を続けてきました。成熟したまちづくりを進めていく上で、こうした運動を続けていくことが大切です。

8月は、平和を考える上で大切な月です。市民の皆さまのご理解・ご協力をよろしくお願いします。

平成30年7月15日号 「森のひと言」

—健康のための三原則—

いよいよ本格的な夏の始まりです。夏は、市内各地の夏祭りや各団体のイベントに参加させていただく機会が多くなります。各地域を駆け足で回る日もあります。さらに、今年は、「公共施設タウンミーティング」や「市民と市長とのほっとトーク」など新たな行事も行いますので、例年以上に動き回る日が続きそうです。元気な姿で市民の皆さんとお会いできるよう、健康には十分注意していきたいと思えます。

健康に関するさまざまな情報がちまたにあふれていますが、私は、昨年105歳で亡くなられた著名な医師の方から、生前お会いした時に「健康のための三原則」を教えていただきました。それは、第一にバランスに配慮した食生活の実践です。夏は飲酒が伴う行事や会合が多いので、節度ある飲酒が私にとっての課題です。第二に適度な運動です。以前行ってきた、通勤時のウォーキングや土日のランニングが、「多忙」ということで少し怠けています。運動時間の確保が私にとっての課題です。第三に多くの人との快適なコミュニケーションです。市長という仕事は、多くの人とお会いする機会が多いので、快適なコミュニケーションができるように工夫していきたいと考えています。

市民の皆さんも「健康のための三原則」をそれぞれのやり方で実践して、この夏を元気に過ごしてください。

平成30年7月1日号 「森のひと言」

—三田のまちの顔—

三田市は、7月1日、60回目の誕生日を迎えます。60年にわたるまちの成長によって、三つの「まちの顔」が出来上がりました。

一つ目は、「住みよいまち」としての顔です。ニュータウン開発などによって、「住みよいまち」として大きく成長してきました（「住みよさランキング2018(東洋経済新報社 公表)」では、兵庫県下で第3位の都市として評価されています）。

二つ目は、「豊かな食文化のまち」としての顔です。三田米、三田牛、近郊野菜、スイーツなど、豊かな三田の自然の恵みです。

三つ目は、関西を代表する大学・短大のキャンパスや県立博物館などが立地する「学びの都」としての顔です。若者が集う「大学のあるまち」は、多くの自治体の憧れです。

三田の成長によってできた三つの「まちの顔」を、未来につないでいかなければなりません。さらに人口減少、高齢化、地域コミュニティの希薄化などが進む中では、成熟したまちにふさわしい「まちの

顔」を新たに創らなければなりません。それは人々が支え合いながら共に笑顔で生きる「共生のまち」としての顔です。「まちの顔」が見えるまち、それは市民にとっては誇りであり、市外の人にとっては憧れです。次の60年先を目指したまちづくりを進めていきましょう。

7月1日、新たなまちづくりの歴史が始ります。

平成30年6月15日号 「森のひと言」

—三つの「共生」を目指して—

今回、三田のこれからの「成熟のまちづくり」にとって大きな一歩を踏み出すことになる動きがありました。一つは、私の諮問による「三田市障害者虐待に係る対応検証委員会」の設置であり、もう一つは三田市が独自に条例設置している「オンブズパーソン」からの調査結果通知です。共に三田市の対応について警鐘を鳴らすメッセージが込められています。

前者の委員会では、今後、具体的なメッセージが作られていきます。障害者虐待の事案を通じて、福祉や人権尊重のまちづくりについての市役所の対応について厳しく問われるとともに共生のまちづくりにとって貴重な提言が期待されます。

また、後者のオンブズパーソンの調査結果からは、いわゆる「野焼き」の問題を通じて、環境保護や農業振興に関する市役所の対応について疑問視されるとともに、隣接する住宅地域と農業地域との共存の在り方について問われています。

私は、これらの機関からのご指摘、ご提案について真摯に対応するとともに、三田市が目指す「成熟のまちづくり」の根幹である「人と人との共生」「人と自然との共生」「地域と地域との共生」の具体的な施策の実現につなげることが大切であると考えています。そのため、三田市が置かれているさまざまな状況を的確に把握しながら、検討を進めてまいります。

今回の二つの警鐘を市政のピンチと捉えるだけでなく、市政を変えていく大きなチャンスと考え、市政を混乱させることなく、市民の皆様のご理解とご協力をいただきながら、粘り強く対応していき、「三つの共生」の実現に向けて全力を尽くす所存です。市民の皆様のご理解をよろしく願います。

平成30年6月1日号 「森のひと言」

—新たなビール文化を三田から—

第2回三田ビール検定を、今年も11月3日に開催し、6月1日から募集を開始します。多くの方々にお申し込みいただきと思っています。

昨年の第1回三田ビール検定では、223人の皆さんがチャレンジされました。三田市民に加え、市外から91人の方々にご参加いただき、中には、北海道から参加された熱心な「検定マニア」の方もおられました。私も、果敢にチャレンジし何とか合格しました。

さて、「三田ビール検定」は、大きな志のもとで誕生したものです。それは、三田の地に「新たなビール文化」を創造し、三田の名を広く全国に知らしめるというものです。毎年、11月3日には、ビールをこよなく愛するビール党が全国から三田に集い、ビールを飲みながら豊かな三田の食材を味わい、ビールに関するさまざまなうんちくを語り合う人の輪が、街のあちこちに見られる。そこには、ビールを通じた、成熟したまちの文化があるのではないのでしょうか。

多くのビール好きの皆さんが三田ビール検定を受検され、2回、3回と長く継続されるとともに、三田市民の皆さんにさまざまな形で支えられることにより、三田のまちに新たなビール文化が創造されることを期待しています。

平成 30 年 5 月 15 日号 「森のひと言」

—学校と地域—

三田市では、子どもたちの健やかな育ちを応援し、各学校の教職員の皆さんの熱心な教育活動を支えるため、厳しい市の財政状況ではありますが、次代を担う「人づくりの推進」を市政の最重要課題に位置付け、学校での教育環境の充実に努めているところです。さらに、子どもたちの安全確保のために、今春、全小学校区の通学路などに計 200 台の防犯カメラも設置しました。

一方、市内の各地域では、学生から高齢者までの幅広いボランティア活動により、子どもたちの登下校時の見守りによる安全確保、子どもたちの健全育成のための補導、子どもたちの視野を広げる体験学習の提供などが活発に行われています。三田の子どもたちの「育ち」が、地域の方々にはしっかりと支えられていることに深く感謝申し上げます。これらの活動は、学校の教育活動を支えるだけでなく、地域活動を活性化する契機ともなっています。

以前、ある雑誌のコラムで、「いい地域にいい学校がある。いい学校はいい地域をつくる」との言葉がありました。三田市内で「学校と地域」との良い関係が広がっていき、三田が「学びの都」として発展していくよう、子どもたちの教育環境のさらなる充実と地域活動の活性化を支援してまいります。

平成 30 年 5 月 1 日号 「森のひと言」

—共生のまち—

この度、三田市内で二十数年間にわたり、長男を自宅のおりに閉じ込めたとして、父親が逮捕されるという事件が起きました。市内において地域との交流が希薄化する中で、このような不幸なことが起こっていたことについては、大変悲しいことであり、その間の市役所の対応については非常に申し訳なく、市長としての責任を痛感しています。

こうした事件が二度と起こらないように、近く設置します第三者委員会において、専門家の方々にはしっかりと検証していただき、その検証結果を踏まえながら、福祉サービスが必要な家庭が孤立しないための市役所の支援体制や、開かれた地域との交流の仕組みを作り直していきます。

三田市は、昭和 50 年代以降、ニュータウン開発などで急速に成長してきました。こうした成長の時代には十分に認識されていなかった「共生の理念」を、これからの成熟の時代のまちづくりの基本理念に合うよう、作り直さなければなりません。今回の悲しい事件を教訓として、市制施行 60 周年を迎えた今年を「成熟した共生のまち三田」の誕生の年にしていかねばなりません。

市民の皆さんのご理解・ご支援をいただきながら、長く厳しい道のりになるかもしれませんが、「共生のまち」づくりの具体的施策を着実に進め、三田市の新たなまちのイメージを創り上げていきます。

平成 30 年 4 月 15 日号 「森のひと言」

—新たな人生の旅立ちの時に—

『今年も、市内のあちこちで入園式、入学式、入社式など、新たな「人生の旅立ち」が見られました。華やかな桜の花の下を、子どもから若者までが緊張した面持ちで迎えるこの時期、私はいつも不思議な気持ちにさせられます。私の 66 年間の「心のアルバム」の中で、入学式や入庁式の時の独特の緊張感は、毎年、鮮やかによみがえってきます。「未知の人間社会」への旅立ちでした。幼い子どもにとって

はとても大きな冒険ですし、社会に出る若者にとっては大きな試練です。

いくら科学技術が進んでも、人間関係の複雑さは変わりません。むしろ、より人間関係は複雑化していくのかもしれませんが。学校での「不登校」や「いじめ」、職場でのさまざまな「ハラスメント」、そして社会からの「引きこもり」は、複雑化した人間関係の中で起こり得るものです。これらの社会問題を少しでもなくしていかなければなりません。そのためには、人間関係が複雑化する社会においても、一人一人の人権を尊重し合い、多様な価値観を認め合う「共生社会」をそれぞれの地域で構築していかなければなりません。市制 60 周年を迎える今年、三田市では「障害者共生条例」の制定や「性的マイノリティ特設電話相談」の開始など、さまざまな取り組みを行うことにより、成熟した「共生社会」の実現を目指していきます。市民の皆さんのご理解とご支援をよろしくお願いいたします。』

平成 30 年 4 月 1 日号 「森のひと言」

—さまざまな出会いは人生の宝物—

3 月 20 日、29 年度「さんだ生涯学習カレッジ卒業式・修了式」が行われました。毎年参加して感じるのですが、4 月に行われる同カレッジの入学式とは学生さんの表情が大きく異なります。入学式では、見知らぬ同級生との初対面に緊張されている方が多いですが、卒業式では、3 年間学生生活を共にしてきた同級生と席を同じくするためか和やかさが感じられます。

同カレッジでは、人生経験が異なる高齢者が集われるため、同級生の方々からさまざまな刺激を受け新たな生き方を発見することがあるとお聞きします。

さまざまな人と出会い、それぞれの「人生経験・生き方」を知るということは、自分の人生・生き方を振り返るとともに、これからの人生を考える上で貴重なものです。そして、さまざまな人たちとの「出会い」の積み重ねは、人生の「宝物」です。生き方や価値観が異なる人たちとの出会いを大切に、多様な生き方や価値観を受け入れることが「成熟社会」の土台ではないかと感じています。

保育所、幼稚園、小学校から大学、そして会社など、毎年 3 月は「人との別れ」、4 月は「人との出会い」の季節ですが、それぞれの出会いを大切にしながら、さまざまな人生を過ごしている人たちとの出会いの機会を持つことが、子どもの教育や人づくりには大切なことではないでしょうか。さまざまな出会いは人生の宝物です。